

混血のカレコレ～黒い 獣～

黒い幻想

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、カレコレ屋とは違う「もう一つの何でも屋」の物語である。

目次

始まり

1

始まり

「お、おい！あのマンティコアを一瞬で・・・」

「予想以上の逸材だぞ・・・これが獄狼の力か・・・」

戦い。それが俺の生きる理由だった。だから、俺はそれに委ねた。いや、俺にはそれ
しかなかったから。

くく

「これでよし、と。」

「エース君、何してるの？」

「ホノカか。少し看板作りをな・・・」

「そつか、今日からだったね。何でも屋開くの。」

「ここは俺達の家で、仕事場でもある。そしてこの家には俺とホノカの他にも二人の住
人がいる。」

「本当にいいのか？嫌なら手伝わなくて構わないが・・・」

「ううん、ホノカもエース君を手伝いたいしね。」

「そうか・・・ん？」

階段から足音が聞こえる、先ほど言った二人の住人であるコトリとウミが降りてきた。

「エース君？ポスター作り終わったよ？」

「コトリ、エースは忙しいんですからあまり」

「いや、気にしなくていい。」

「でもエース……」

「そんな事より、早く開こうよ！」

ウミの言葉を遮ってホノカが早く開店するように急かした。

「そんなに急かすな、まだ時間はたっぷりある。」

「ちえ〜。」

だが、慌てる必要はない。奴らを探すのが目的だが何も急ぎでする事ではない。

「そうは言いましたけど、どのようによければいいのか……」

「それについては問題ない、同業者に聞いておいてある。」

「同業者？」

「ああ、今日も同業者との約束があるから行ってくる。」

「いつてらっしや〜い」

「遅くならないようにしてくださいね？」

三人の少女に見送られて俺は家を出た。

くく

「すまない、遅れた。」

「良いつて！俺達も着いたところだから。」

「それで、今日から開くんだよね？」

「ああ、お前達からは色々教えてもらった。感謝する。」

約束のカフェにいたのはカゲチヨとヒサメ、数少ない友達だ。そして、俺達と同じ
トッププレデターに体を作り替えられた混血児でもある。

「良いつて、俺達はダチなんだからさ。」

「カゲがそんな事言うなんて、珍しいね。」

「うるせえ！」

軽口をたたき合う2人、正直これで付き合っていない事に驚いている。

「お礼にこちらからも色々情報提供させてもらう。」

「おう。」

「でも、無茶だけはしないでね？」

「分かってる、それより何か食べたい物はあるか？よければ奢るぞ？」

「え、いいの？」

「ああ。」

ヒサメの表情がパツと明るくなる。

「ヒサ、食べすぎんなよ。」

「一言多い！」

「痛い痛い！悪かったって！」

「それでは行くぞ。」

こうして、俺は楽しい一時を過ごした。なお、帰ってホノカ達に遅くなった事を怒られたのは言うまでもない。